

虚子記念文学館投句特選句

・令和四年九月

稲畑廣太郎 選

師在さず水音も小さき庭の秋

新潟 安原 葉

師は旅にあると思うて庵の月

東京 荒川ともゑ

波音は銀のつぶやき夕月夜

兵庫 中村恵美

光透け朝の満月とけてゆく

兵庫 足立朱麻

艶めきのはみ出してゐる踊笠

奈良 河村久美子

天高し永久に芦屋の松林

兵庫 田村恵津子

灯を落とし月明に聴くホロヴィッツ

兵庫 池田雅かず

空透ける桜紅葉の一葉ごと

岡山 小幡恒雄

大琵琶に歓喜の集ひ湖の秋

大阪 徳永由起子

のら猫の集ふ祠や夕月夜

兵庫 武田奈々

(青少年)

入選句・令和四年九月

回顧展師の大きさを偲ぶ秋	愛知	田中美子	箒目の上書してゐる萩の風	兵庫	高野さち
師の在さぬ館淋しめず小鳥来る	大阪	徳岡美祢子	鈴虫の君に鳴きつつ星に鳴く	三重	松村咲子
芦屋川河畔歩めば赤蜻蛉	石川	辰巳昌彦	皆会釈してすれ違ふ花野かな	兵庫	金田八江子
深閑と庭水音に秋の声	大阪	石橋玲子	名を変へてゆく優雅さよ秋の月	兵庫	山口弘子
扁額の水茎涼し年尾の句	兵庫	山本康子	迷路めく邸の一劃藤袴	兵庫	山之口倫子
回顧展先師に闘志もらふ秋	愛知	中野ひろみ	もの言はぬ飼猫も又秋暑し	大阪	谷本房子
鈴虫や余韻にひたる独りの夜	兵庫	槌橋眞美	芋虫や見逃す夫と潰す妻	兵庫	塚本武州
初秋のアイロン滑る絹のシャツ	大阪	生澤瑛子	夕月夜残り香風にさらわれて	兵庫	山田将大
蛸や天川村に旅装解く	大阪	加藤あや	夜長なり炭酸ぬる湯半時間	兵庫	小川孝子
庭の声聞き分けてゐて夜長なる	兵庫	平田 恵	そぼ降れど空の彼方の月おもふ		(氏名未記入)
長き夜やそれでも地球は回つてる	兵庫	前田容宏	夕月夜擬宝珠に残る刀傷	兵庫	武田優子
締切りに間に合はさねば夜長の灯	兵庫	高橋純子	名月や天の美貌として生るる	京都	西村やすし
追慕とは深みゆくもの露の秋	大阪	杉山千恵子	生姜市甘き香りの素直なり	兵庫	河野ひろみ
雷神に叩き起こさる厄日かな	奈良	堀田ますみ	秋の花活け虚子館の談話室	大阪	多田羅紀子
鬼灯を鳴らし回顧を膨らます	大阪	立入宮子	宵月や恩師を偲びゐる家居	徳島	奥村 里
館涼し師に賜りし友と居て	兵庫	川村ひろみ	気風良くおまけ一束生姜市	大阪	西尾浩子
鈴虫の求愛の声おほつひら	三重	池本準一	夕月の雫を仄と波の面へ	兵庫	涌羅由美
古ぼけた写真一枚敗戦忌	大阪	山下幸典	翫雲水族館は改築中	兵庫	吉村玲子
学ぶとは集ふことなり灯下親し	兵庫	黒田千賀子	蕊ふれて夕へ色注ぐ曼殊沙華	鳥取	前田 千
柵越しに聴く師の庭の昼の虫	兵庫	玉手のり子	記念樹の桂に秋の声を聞く	大阪	林 曜子
モーダメだの終の文字見し子規忌かな	大阪	大橋明子	秋風や俳磚の影動かしぬ	兵庫	辻田あづき
長き夜の人恋しくて聴くラジオ	兵庫	小柴智子	師のまさぬ庭と思へば萩の風	兵庫	岸川佐江
長き夜の歯に染み透る吟醸酒	兵庫	上岡あきら	降りやうも鳴りやうも又厄日なる	兵庫	永沢達明
汀子展へさやけき扉開きけり	兵庫	内田泰代	爽やかな青空過ぎて悲しまん	兵庫	奥田好子
乗り越えて行かねばならぬ爽やかに	三重	永井二紗子	新涼の風にカーテン生きてをり	石川	辰巳葉流
流されし万羽の地鶏秋出水	奈良	堀田建夫	虚子館に来客多き子規忌かな	兵庫	藤井啓子
影乗せて明き山湖月の秋	兵庫	宮本露子	汀子晴とは今日の晴れ秋高し	香川	真鍋孝子
軽やかに風船葛ハート秘め	大阪	若林友子	須磨人となりて白萩抱き起こす	兵庫	辻 桂湖
			等分といふは難題西瓜切る	兵庫	中井陽子

秋めいてくればあれこれしたきこと	京都	山崎貴子	鈴虫の翅きはやかに屹立す	愛知	小野 薫
秋灯下ひらかなで押すキーボード	兵庫	岩水ひとみ	仏界の赤き使者かな曼殊沙華	兵庫	伊集院秀樹
大阿蘇の夜空を埋め望の月	兵庫	小杉伸一路	丸皿へ真一文字や初さんま	兵庫	キートスばんじょうし
窓開けて師の覗きさう秋晴るる	香川	三宅久美子	大玉の西瓜のなかにある記憶	兵庫	太平楽太郎
白萩のうしろ幽き水の音	兵庫	二瓶美奈子	淡路より須磨の浦へと月の道	香川	葛原由起
なつかしき名を俳磚にほたる草	兵庫	細田清子	少年に少年なりの愁思かな	和歌山	中島紀生
緑藻のやうな蛾に逢ひ瞬きす	三重	水越晴子	実椿のはじけて実生叡山へ	大阪	湯浅たかし
やあ君はそこに居るのか鉦叩	兵庫	池田文子	透きとほる父の作りし今年米	兵庫	阿曾宏之
元気出せ出せよと館の萩揺るる	大阪	須知香代子	一陣の風とどまらせ真葛原	神奈川	金子三奈乃
野点あり巫女の舞ひあり萩盛り	大阪	河辺さち子	萩の花ものごしやわきおいはん	東京	宮村土々
秋風や玻璃戸を叩く雨の音	奈良	堀ノ内和夫	コスモスのエールにペダルなほ軽く	神奈川	小林 心
窓ぎわのうすあたたかな日曜日	大阪	松田静香	骨壺に納めし遺骨軋む秋	滋賀	近江堇花
身にぞ入む虚子真筆の軸数多	京都	奥原尋嘉	みちのくの案山子のどこか二刀流	神奈川	小堀公美子
虚子蔵書垂涎三尺館涼し	大阪	中平絢子	雨の萩揺るれば光散り乱れ	埼玉	土井洋子
虚子扁額書に端座して館涼し	奈良	柴田香女	師は万の祈りを受けて秋深し	神奈川	進藤剛至
立待ちや猪口一杯の残り酒	奈良	豚々舎休庵			
稻咲くや蜂は花粉を団子にし	東京	櫻庭 寛			
法師蟬命のかぎり法師呼ぶ	兵庫	岡元泰志			
翳雲座禅の寺に風起こる	兵庫	高市敦之			
長き夜の静謐に耐へ恋衣	兵庫	福田光博			
山韻の整ふ夜更なる子規忌	京都	杉森大介			
秋草や備前の壺に収まらず	兵庫	山崎渺美			
いつも吾を庇ひくれし子女郎花	兵庫	ほりもとちか			
廃線の果てまで続く秋の草	兵庫	山岸正子			
顔寄せてひそひそ話秋扇	兵庫	道中義臣			
台風の無事それ静か汀子邸	兵庫	岩鼻絹子			
海見えて花野の丘の淡路かな	兵庫	柄川武子			
徒をりて唯咲くのみぞ藤袴	神奈川	平野孤舟			
今日もあけゆくあめつちの芒かな	東京	木村三球			